

改革開放期

(九州大学) 益尾 知佐子

本日はお招きいただきありがとうございます。現在、このようなシンポジウムを行うことはとても意義のあることだと思います。と申しますのも、日本における中国論というのが、現代中国の研究をやっている人間の手から離れて久しいからです。日本の中では、中華思想のみで中国の脅威を論じることが定番になっていますし、中国は朝貢体制を復活させようとしているとか、覇権主義への野望を持っているとかといった言説がとて増えています。中国のことを、わけがわからないであるとか、狂っているとか、初めからそういうふうに論じる言説が溢れています。

しかし、近年、日本社会の中で周縁化してしまった中国研究者の立場からすると、中国や習近平がやっていることというのは、かなり理解できるなというのが実感です。私の見方では習近平は、中国の人がよく「百年大党」などと呼ぶ中国共産党の、100年間の党史の上に乗かって、党を指揮し動かしている人だと思います。ですので、共産党の党史研究を踏まえると、「あ、彼はこの時この人がやっていたこの手法をいま使っているな」という既視感がしょっちゅうあります。党の歴史を踏まえて中国のいまを考えることは、とても有用な作業だと思います。今日はそうした観点から、現在の中国と改革開放期を結びつけてみたいのです。

とはいえ中国共産党は、マルクス・レーニン主義のオーソドックスなところからはすでに相当外れており、それを換骨奪胎したご都合主義のハイブリッドになっています。習近平は党史のいろんなところから都合のいい部分を引っ張ってきて、それらを組み合わせながら党の組織運営をしてい

ます。例えば、すでに石川先生から紹介がありましたが、中国革命の部分から、秘密主義とか、党のラインで命令を発してその規律を党員に求めて組織を運営していくといったやり方を使っています。また文化大革命期からは、毛沢東の個人独裁の手法も借用しています。習近平自身が紅衛兵だったので、彼は毛沢東が多用していた大衆煽動やポピュリズム的なやり方をまねています。そして改革開放期からは、党の生き残り戦略や、組織運営の方法論をかなり継承していると思います。

改革開放期に関して一番重要なのは、市場経済を活用する、それによって中国の経済発展を実現するという部分です。あとは、その時期に党内で確立したやり方、グラハム・アリソンの第2モデルの用語を使って言えば、“Standard Operating Procedures”（標準作業手続き、以下SOPと略記）、すなわち「仕事はこういうふうに進めるものだ」と皆が考えるやり方を引き継いでいます。加えて、エリート主義、競争主義、それから軍の近代化戦略、科学技術崇拝なども、その時代から継承したものです。

中国共産党は、マルクス・レーニン主義の核心的なスピリットのようなものはすでに失念しています。ただそれは言うなれば、「満洲国」の政府の建物にそのまま新中国の人たちが入って政府機能を維持しているようなもので、「建物」の構造は残っているのだと思います。考え方の枠組にあたるものの影響は今日もまだあり、その面においては、中国共産党の動き方の特徴はコンストラクティビズム（構築主義）で説明できるのかなと思います。

のちほど少し詳しくお話しますが、改革開放期を経て、党組織の運営の手法には党内で一定のパターンが定着しました。だからこそ、中国の人たちはトランプの不規則性というものをすごく嫌がりました。つまり彼らから見ると、習近平というのはまったく不規則なリーダーではなかった、

ということなのでしょう。もちろん、中国共産党にもある種、“path dependent”（経路依存的）な側面があります。これまでの経緯の中で、これは党内で自動的に処理できると判断できる問題もあれば、最高指導者に決定が委ねられる性質の問題もある。そのラインを見極めるには、やはり共産党史への理解が非常に重要になっていると思います。

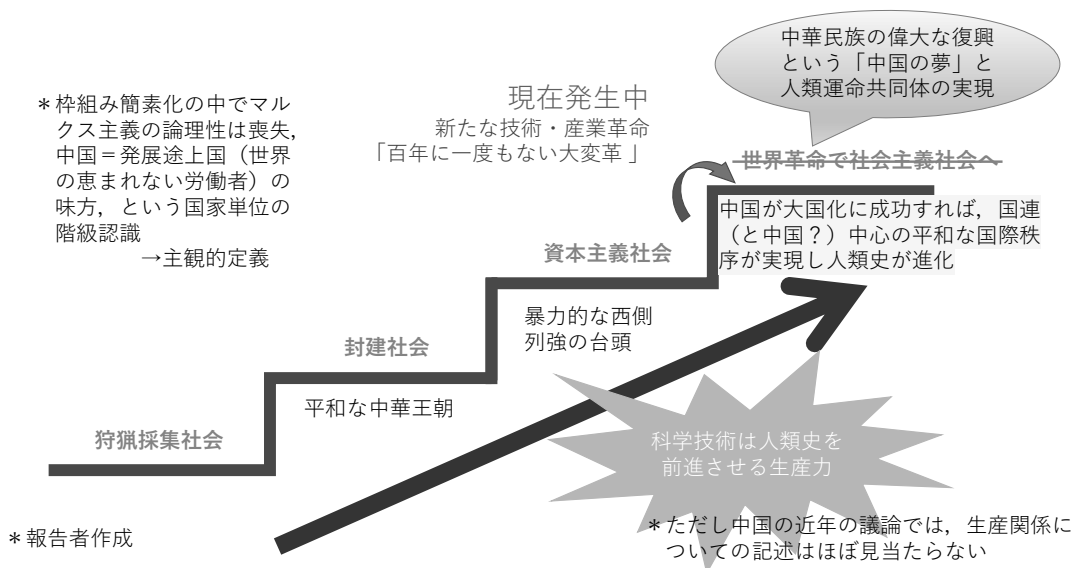
ここでもう少し習近平の統治の特徴を考えてみたいと思います。彼をご案内のように、とても歴史にこだわる人です。現在は100年に一度もない大変革の時期だとか、歴史の正しい側に立つべきだとか、よく発言しています。先日は世界の政党大会（政党指導者サミット）でも、各国の政治家に対して「歴史の正しい側に立とう」と呼びかけ始めました。彼は本気で自分が歴史の正しい側に立っているつもりなのです。そうした発言は、マルクスが言っていた唯物史観を形の上で踏まえているからこそ出てくる。またこれが共通認識の土台になっているからこそ、中国の多くの人々には彼のやろうとしていることが共有されやすいのだ

ろうと思います。

この考え方の枠組みは、マルクス主義が中国に伝わってから徐々に変化を始めていたと思いますが、改革開放期にぐっと簡素化され、定着しました。図1は唯物史観と習近平の主張の関係性を私が図式化したものです。階段状になっている部分は、本来は生産手段や生産関係の変化に基づいて、歴史が段階的に進化するというマルクスの考えの骨子を示しています。

マルクスは人類の歴史を、物的基礎の変化によって進化するものと捉えました。どうやってそれが起きるのかという歴史発展の原動力について、彼の議論は本来、緻密でした。でもそれを度外視して、「科学技術が生産力だ」というふうにシンプルに言い換えたのは、中国共産党の鄧小平です。彼は文化大革命の末期、1975年にそうした考えを提起し、毛沢東に批判されても取り下げなかったために、毛沢東との意見対立が顕在化して3回目の失脚をしました。しかし、改革開放以降、中国は鄧小平のこの見解に基づいて国づくりを進めていくことになります。今年から始まった第

図1 現代中国版・マルクスの唯物史観



14次五カ年計画は中国産のイノベーションの実現を極めて重視するものになりましたが、それはこの「科学技術が歴史を進めていく」という考えを、習近平が明らかに引き継いでいるからです。

ただし改革開放が経済発展を実現したことで、中国が昔、描いていた社会主義時代への夢みたいなものはしぼんでいきました。では、そうすると歴史はどこに向かって進んでいくのか。習近平はその目標を、「中華民族の偉大な復興」という「中国の夢」、そして「人類運命共同体」の実現と明確に再定義しました。また彼は、マルクスの唯物史観に、改革開放期に普及したナショナリスティックな歴史的解釈も加えていきます。そして、封建社会の時代においては中華帝国は平和に周辺地域を治めていたが、産業革命によって資本主義時代に突入し、暴力的な西側諸国が台頭したことで、中国も食い物にされた、と解釈していきます。

よく彼は、100年に一度もない大変革がいま起きているというように言うのですが、これはどう捉えたらよいのか。中国は抗日戦争の恨みをあれほど私たち日本人に語っていたのに、いまが100年に一度なら、現在は抗日戦争よりも重大な時期だという意味になります。唯物史観を踏まえれば、これは彼が、現在の変化によって「歴史段階の変化がもたらされる可能性が高い」、とイメージしているということなのだと思います。現在発生している新たな産業革命、技術革命を、イノベーションによって取ることができれば、次の時代を制するのは中国だ、ということなのでしょう。そうやって中国が大国化に成功すれば、国連と中国中心の平和な国際秩序が実現し、人類史が進化するというのが、彼の説明なのだと思います。これはもちろん、そのような決定的状況乗り越えるためには強いリーダーが必要だから、自分が政権を担い続ける、という意思表示にも繋がっています。

このような見方からは、マルクス主義の論理性は喪失しています。でも、マルクス主義では共産

党が労働者の味方とされていました。習近平も、中国は恵まれない発展途上国の味方だと主張しています。マルクスは世界を社会的な階級によって捉えていましたが、それが国家単位の認識に刷り変わっているわけです。そうした考え方は習近平に固有ではなく、改革開放初期に整理された中国外交の新たな考え方を踏襲しています。

谷川先生にご指摘いただきましたが、文化大革命終了時の中国は非常に大きな問題を抱えていました。むしろ文化大革命があったからこそ、次の改革開放期の変化が生じていきました。文革で中国共産党が中国全体を疲弊させたために、毛沢東が死去したあと、どうやって人心を取り戻して党を再建するかが深刻な問題になりました。そうしないと、共産党は人々の反感の対象になってしまっただけで生き残れない、執政党としてやっていけないという認識があったからです。

そこで中国共産党はいろいろなサバイバル戦略を取ります。鄧小平が指導権を握った改革開放初期には、党の内側ではまず、党内秩序の回復を進めます。右派を含む人々の名誉回復を行いましたし、第二の歴史決議を作ったり、党内民主化を進めたり、若年幹部を登用したりしたわけです。若年幹部の登用は、党がエリート化していくきっかけになります。

党が統治している民衆、つまり下側に対しては、彼らの支持の取り付けに努力します。その中で一番大きかったのが経済自由化の容認で、社会主義市場経済などという都合のいい名称を生み出して経済自由化を進めます。これによって社会主義の容れ物の中に資本主義があるというキメラ状態、つまり本来相容れない異なる生物どおしが合体して生きるという状態が生じていきます。ただし人々への政治的な締め付けを緩めた結果、イデオロギー上の理想や夢といったものが揺らいでいきますので、それをナショナリズムで埋めていくということを行います。

また共産党はこのころ、対外側、つまり対外政策の面では革命外交の放棄を行います。時間的にはこれが一番早く、中国でイデオロギーが骨抜きになっていく先駆的な現象がみられたのは対外政策の面ででした。1979年から1982年にかけて、中国は対外政策を見直し、近代主権国家体制といわれる国家単位の国際関係認識、これを全面的に肯定していく方向に舵を切りました。それは実際には、階級単位の国際関係認識と革命外交の放棄を意味していました。それによって、共産党は他国の共産党への支援を差し止め、かわりに中国を発展させていくための資金、技術、知恵などを世界に求めていったわけです。

冷戦終結に10年以上先駆けて、共産党は執政党としての実利戦略に転換していました。のちに発生した冷戦構造の瓦解は、本来であれば共産党にとっての最大の危機なのですが、中国共産党はそのだいぶ前に政策転換に乗り出していたため、この危機をなんとか乗り越えていくことになります。

その後の江沢民期、胡錦濤期にも、中国共産党

はさまざまなサバイバル戦略を次々と打ち出します。発展へのインセンティブ向上のため、党員統制のルールは緩めまし、**「三つの代表」**を打ち出して党に企業家を取り込もうとしたりします。

ところが、中国共産党はその時その時で、「いまこれが必要だ」という認識に基づいて場当たりに新政策を打ち出していきましたので、時間が経つとそれらの間の関係性ですとか、あるいは全体としての一貫性に深刻な問題が生じていきます。また、まさに中国共産党が経済発展に成功したがゆえに、格差の拡大であるとか、社会的な競争の激化であるとか、環境問題であるとかのさまざまな問題が生じてきて、共産党統治への不満が民衆の間でどんどん蓄積していきました。それによって、外交も党の正統性を人々に訴える道具になっていき、党が一生懸命、外の敵に対するナショナリズムを国内で増幅していったという側面があります。こうした新たな問題にどのように対処するかという課題は、その後の習近平時代に積み残されることになります。

ただし、あまり議論されませんが、長期政権の

図2 改革開放期に整った中国共産党のStandard Operating Procedures (SOP, 標準作業手続き)

長期政権の運営にとって 改革開放によってStandard Operating Proceduresが整えられたことは重要



習近平の理想の下での、単一的で完全な国内ガバナンス構築の基盤

運営という観点から見れば、改革開放期に党内のいろいろな手続きが整っていった、そしてそれが長い時間を通して中国の官僚制の中に組み込まれていったという基礎は、今日の中国を読み解く上でカギになるのではないかと思います。

これは、中国ではだいたいこういう順番で物事が進められていくという手順を、私が勝手に整理したものです（図 2）。これが中国版の「標準作業手続き」と言えます。こういうステップが徐々に整備され、制度的にしっかり構築されたのは改革開放期で、中国ではいまは多くの人がこれを「当たり前」と思っています。もっとも、昔は3番のところはやったりやらなかったりでしたが、このあたりを一生懸命やりたがるのは習近平の特徴です。しかし、全体構図は彼の時代にも大きく変わっていません。

習近平は現在、この枠組みを使って、彼の理想に沿った、単一的で完全な国内ガバナンスを構築していこうとしています。そして、彼が長い間の幹部経験を通してこのSOPの利用に非常に精通しているからこそ、彼は多数の党員を動かすことに成功し、自身の個人独裁の強化もできる。さらには中国という巨体をしっかり動かすことができる。つまり今日の中国政治は、改革開放期と全く違う方向に発展しているように見えますが、実際にはその土台の上に立って動いているのではないかというふうに思います。